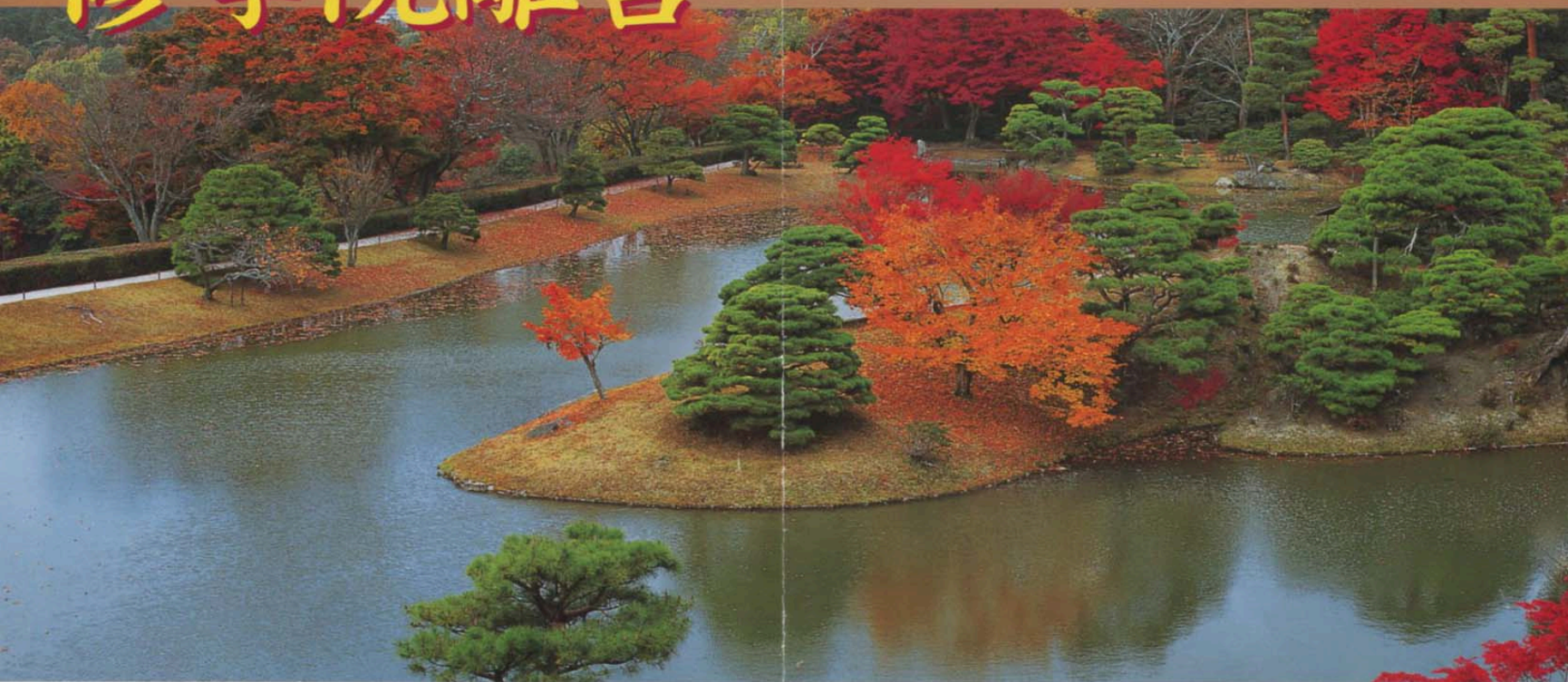


修学院離宮

Shugakuin Imperial Villa



■修学院離宮の歴史

修学院の名は、10世紀後半ここに修学院という寺が建立されたのが始まりであった。南北朝時代以後この寺は廃絶したが、地名は修学院村として残った。修学院離宮は、桂離宮におくれること30余年、明暦元年から2年（西暦1655～1656年）にかけて後水尾上皇によって造営工事が起こされ、万治2年（1659年）頃に完成した山荘である。離宮の造営より早く上皇の第一皇女梅宮が得度して、現在の中離宮付近に草庵を結び、円照寺を創建されていたが、早くから別荘としての適地を探しておられた上皇は円照寺を大和の八嶋に移し、上と下の二つからなる御茶屋を建設した。幕府との間に緊張が続いた時代であっただけに、短期間にこれほど大規模な山荘を造営し得たことは一つの驚異でもある。中の御茶屋は創建当時の山荘にはなかったものであるが、上皇の第八皇女光子内親王（朱宮）のために建てられた山荘に東福門院（後水尾上皇の皇后、将軍徳川秀忠の娘和子）亡き後の女院御所の建物を一部移築して拡張した。上皇崩御の後、光子内親王は落飾得度してこれを林丘寺となされた。明治18年（1885年）林丘寺門跡から境内の半分が楽只軒、客殿とともに宮内省に返還さ

このパンフレットは、**宝じ**の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



れたので、離宮に編入したものである。昭和39年（1964年）上・中・下の各離宮の間に展開する8万㎡に及ぶ水田畑地を買い上げて付属農地とし、景観保持の備えにも万全を期して今日に至っている。

■概説

比叡山の麓、東山連峰の山裾に造られた修学院離宮は、上・中・下の三つの離宮（御茶屋）からなり、上離宮背後の山、借景となる山林、それに三つの離宮を連絡する松並木の道と両側に広がる田畑とで構成されている。総面積54万5千㎡を超える雄大な離宮である。明治期に宮内省の所管となるまでは離宮を囲む垣根も全周にはなく、自然に対して開放された山荘であった。

下離宮には、創建時では最大の建物の彎曲閣があったが、比較的早い時期に失われ、今は南を庭園に囲まれた寿月観が残っている。中離宮には、楽只軒と客殿があり、やはり南に庭がある。上離宮は、修学院離宮の本領であって、谷川をせき止め浴龍池と呼ぶ大きな池を中心にした回遊式庭園となっている。その浴龍池を一望におさめる東南の高みには隣雲亭、中島に窮遠亭がある。山麓に広がる離宮のため上と下の離宮の標高差は40m近くあり、大小の滝に加え水流の早い小川もあり、どこにいても絶えず水の音を聴くことができる。昔は畦道にすぎなかった松並木から眺める風景もまたすばらしい。

京都御所、京都大宮御所、仙洞御所、桂離宮とともに皇室用財産（国有財産）として宮内庁が管理している。



■ 下離宮

■ 寿月観

柿茸の屋根と花菱紋の透かし彫りが施してある板戸の御幸門（上段写真）から下離宮に入る。さらに中門を潜ると眼前に庭園がひらけてくる。左手の緩やかな石段の上には寿月観の玄関「御輿寄」が見える。袖形灯笼、朝鮮灯笼等を配した苑路を上ると寿月観（下段写真）の前に出る。創建当時のものではないが、文政年間に旧規のとおりにより再興されたもので、一の間に掛かる「寿月観」の扁額は後水尾上皇の宸筆である。下離宮は、上離宮への拠点でもあり、今はない彎曲閣とともに相当のもてなしのできる設備が備わっていたと思われる。建物は柿茸入母屋敷寄屋風造りとなっている。

一の間は十五畳で三畳の上段を設け、一間半の床と琵琶床、飾棚がある。その棚の戸袋には鶴の絵、下の地袋には岩と蘭の絵が描かれ、筆者はともに原在中である。また、襖四枚には虎溪三笑の絵が岸駒により描かれている。ここには後水尾上皇のお好みの菱形模様が多く用いられている。

二の間の正面に杉戸があるが、光格上皇のお好みの物で仙洞御所から移したと伝えられている。絵は夕顔の絵で筆者は不詳である。杉戸の内側はお水屋になっている。



三の間はお供の控えの間で襖絵は泊舟で、筆者は岡本豊彦である。南妻に後水尾上皇の宸筆による蔵六庵の扁額が掛かっているが、蔵六庵は別棟にあった建物で今はすでにない。三の間の奥は五畳の間であり、この肘掛窓から覗く外景は四季を通じて美しい。

御幸門と相対する位置にある東門から出ると視界が大きく開け、田圃の向うに比叡の霊峰から東山、北山の山並みが一望される。

■ 中離宮

■ 楽只軒

楽只軒は、光子内親王のための最初の建物であり、その後、内親王の山荘は拡張整備されて林丘寺となった。かなり古い建物で、現在の林丘寺にある扁額の年紀銘から推察すると寛文8年（1668年）かその前年に創建されたものと思われる。南側には庭に面して広縁を設け、床を低くとり庭との一体感を深めている。特別な技巧は凝らしていないが、簡素な中にも趣があり、いかにも内親王の御殿らしい。

手前六畳は一の間で吉野山の桜が描かれ、奥の間は二の間で龍田川の紅葉が描かれている。筆者はともに狩野探信（探幽の子）である。



■ 客殿



楽只軒の東南の高みに工夫のある階段でつながれた客殿がある。延宝6年（1678年）東福門院が亡くなられた後、天和2年（1682年）光子内親王のために女院御所の奥対面所から移築したものである。入母屋造り木賊茸の深い屋根を持ち、板戸を建て、濡縁を回して、その一部に「網干の欄干」と呼ばれる漁村で網を干した形を表している低い手すりを付けている。

一の間は十二畳半で、一間半の飾り棚を構えるが、互い違いに配された大小五枚の棚板がいかにも霞がたなびいているように見えることから霞棚と呼ばれ、桂離宮の桂棚、三宝院の醍醐棚とともに天下の三棚と称されている。戸袋には更紗模様、地袋には友禅染、引手は羽子板の形、花車を形どった七宝流しの釘隠など、女性のお住まいらしい華やかさが現れている。床、襖、壁には和歌や漢詩の色紙を張り交ぜるなど雅を極めている。加えて、随所に見られる飾り金具には葵の紋が配されており、徳川家から嫁いだ東福門院の背後にひかえ



る幕府の権勢が示されているようである。

また、祇園祭の鉦の絵を描いた杉戸の筆者は狩野敦信と言われ、鯉の絵の筆者は不祥であるが、鯉の絵の網だけは円山応挙の筆と伝えられている。

■上離宮

大刈込み

上離宮に上る松並木の道(御馬車道)から左手前方に大刈込みが見える。谷川をせき止めて浴龍池を作った土堤に石垣で四段に土留めをし、石垣上部の斜面を数十種類の常緑樹を混植して広大に刈り込んだ大刈込みで覆っているものである。石垣の目隠しとなる高生垣とともに四囲の自然とよく調和している。



隣雲亭

上離宮の御成門を入ると高い刈込みの間をぬって急な石段を上る。両側の刈込みで視界をさえぎられ、石段がカーブしているので上りつめたところに何が待ちうけているのか見当もつかない趣向が奇抜である。頂上に隣雲亭がある。ふり向けば眼下に浴龍池が展開し、洛北の山々が見渡せる。ずっと左手に洛中の街並みがひろがり、その向うに西山の峰々が望まれる。天下の眺望ここに極まった感じであり、後水尾上皇のお心意気を見る思いである。隣雲亭は文政年間の再建になるものであるが、浴龍池に面しては六畳の一の間と三畳の二の間があり、床も棚もなく一切の装飾を拒んで自然に立ち向かうのみである。北には谷川に臨んで板の間があり、洗詩台という。三方を開け放せば、吹き抜ける風も、木立の奥に6m余りを流れ落ちる雄滝の水音も全くほしいままである。深い軒下のたたきは、漆喰に小石を一つ、二つ、三つと埋め込み、俗に「一二三石」などと呼ばれている。

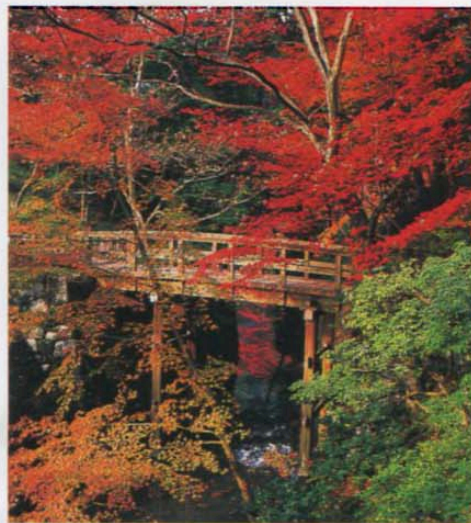
窮遠亭

長さ二間余りの欄干付き木橋の楓橋を渡ると中島の頂上に宝形造りの茶屋窮遠亭がある。文政年間に修復はあったものの創建当時の建物で現存する唯一のものである。「窮遠」の扁額は後水尾上皇の宸筆である。十八畳と附属の水屋の間からなり、一隅に直角に折れて畳一枚高くした上段を設け、上段西側いっぱい低く一枚板を渡して御肘寄としている。



浴龍池

島の形を泳ぐ龍の姿に見立てたものと言われている。池を巡って苑路があり、千歳橋と呼ばれる石橋が、窮遠亭のある中島と浴龍池の中島(万松塙)とをつないで架けられている。切り石を組んだ橋脚二基に一枚石を渡し、二つの橋脚に宝形造りと寄棟造りの四阿風なものを建ててこれをつないでいる。いかにも中国的な感じで自然に溶け込まず異和感があるが、それもまたアンバランスの美といえる。紅葉谷や三保ヶ島の物静かな景観と大刈込みの上に位置する浜辺の西浜は明るくのびのびとした風景であり、対照的に展開する。浴龍池は御舟遊びの場であり、島々を廻りながら管弦や詩歌の会などが行われた。

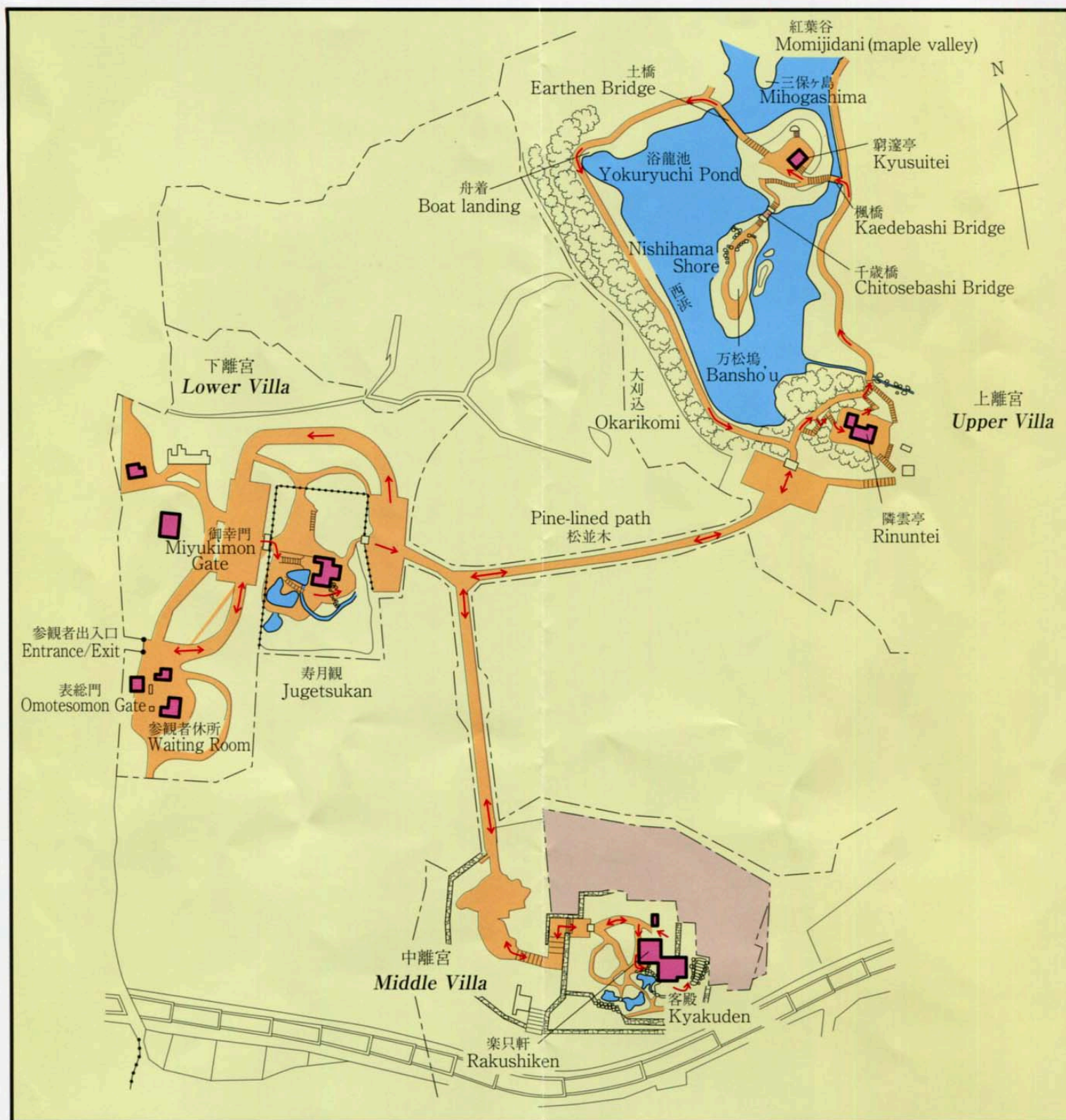


楓橋

西浜



修学院離宮 略図



このパンフレットは、**宝くじ**の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



発行 公益財団法人菊葉文化協
写真・資料提供 宮内